

東京農業大学稲花小学校

学校だより【2021年5月17日】第82号



ホンモノの持つ力

農大稲花小では、専門家に教えてもらう、本物を見せる、現場に連れていくなどの機会を大切にしたいと考えています。幸い、東京農業大学やその関係者の方々から、たくさんの応援の申し出をいただいているのもうれしいことです。本年4月からは、(一財)進化生物学研究所のご理解をいただき、山口就平主任研究員が昆虫標本の展示をしてくださることになりました。

昆虫標本をただ漫然と展示しているのでは、子どもたちの知的好奇心をくすぐることができません。そこにあるのが当たり前になってしまい、せっかくの標本が”見えなく”なるからです。そのため、毎月、展示を入れ替えていただくようお願いしたところ、快く引き受けていただきました。4月は、美しいチョウ、オビクジャクアゲハのなかまと、モルフォチョウのなかまでスタートしました。ただ美しいだけでなく、採取地ごとに模様が微妙に違うことに気づいた子どももいたようです。5月はがらりと変わって、「東南アジアのカレハカマキリ」と「木の葉のようなナナフシの仲間コノハムシ」です。見事な擬態で、子どもたちを魅惑することでしょう。



にぎやかなテラス

今年度は、各学年において農作物の栽培にも力を入れています。近所にお借りしている”稲花小の畑”では、1年生はトマト、2年生はナス、3年生はダイズを栽培するほか、見本としてトウモロコシなども植えられています。1年生はハツカダイコンの種まきからスタートしましたし、3年生は夏野菜のいろいろを自分たちで調べ、選び、栽培しています。

5月14日(金)には1年生が、東京農業大学国際農業開発学科入江憲治教授にご指導いただき、稲の種まきをしました。熱帯作物の専門家である入江教授から世界の稲作の様子を教えてくださいましたあと、大学院生にも手伝ってもらい、土を入れた各自のペットボトル容器に肥料を混ぜます。その後に催芽処理をした種もみを播くのです。教授が播種後に灌水すると、ペットボトル容器の

土に水がブクブクと浸み込む様子を、子どもたちは飽きもせず観察していました。5月18日(火)には3年生が、20日(木)には2年生が、稲の種まきをする予定です。5月21日(金)には、去年は残念ながらできなかった田植えも予定されています。



入江憲治教授の授業風景

朝読書の時間

農大稲花小には、朝読書の時間があります。自宅から持参したり、図書室から借りだしたりして、子どもたちは好きな本を読んでいます。お家では漫画を読んでもいいけど(?), 学校では字を読もうね、と伝えています。

1年生の教室では、読み聞かせも行われています。教室を通りかかると、担任の読む物語に、子どもたちがすっかり引き込まれている様子を見ることができます。文字は遅かれ早かれ必ず読めるようになるのです。最初に養うべきは、想像力、共感力、そして集中力といった力ではないでしょうか。本が好きな子ども、豊かな言語能力を持つ子どもを育てたいと思っています。

すてきな上級生

1年生の給食の配膳を、3年生の当番が手伝ってくれています。さすがに3年生、てきぱきとご飯やおかずをよそっていきます。1年生に見られて、3年生も張り切っているようです。新設校である農大稲花小では、最上級生は3年生。普通ならまだ上に上級生がいる学年ですが、本校では最上級生として下級生の視線も集まります。教員の期待も高いのです。

登校時に1年生と一緒に歩いて来てくれた2年生もいます。「駅で一緒になったから、一緒に歩いてきました」「誰だか知らないけど、制服を着ていたから稲花小の子だとわかったよ」と、子どもたちは子どもたちなりに、学年を越えて友だちを増やしていくようです。中には、上級生を呼び捨てにしてしまうほど仲良くなったらしいツワモノ(?)の下級生もいて、こちらは礼儀の面から「ちゃんと、名字で名前を呼びましょうね」と一言。

下級生に憧れられる上級生が、農大稲花小に増えるといいですね。

校長 夏秋 啓子